

平成二十九年（二〇一七）三月二十五日発行
『大倉山論集』 第六十三輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

大原孫三郎の社会文化貢献

— 大隈重信著『東西文明之調和』の實踐 —

兼田麗子

大原孫三郎の社会文化貢献

— 大隈重信著『東西文明之調和』の實踐 —

兼田麗子

目次

はじめに

一 大原孫三郎の略歴

二 孫三郎の社会文化貢献の具体例

(一) 大原美術館

(二) 三つの科学研究所—大原社会問題研究所、大原

奨農会農業研究所、倉敷労働科学研究所

(三) 倉紡中央病院（現倉敷中央病院）

(四) 倉敷日曜講演

(五) その他

三 背後にあった孫三郎の特徴

(一) 善意と戦略の経営者—ウォーム・ハートにクル・ヘッド

(二) 社会と人間を見る目・「下」からの目線

(三) 使命感・自主的・民間からのリーダーシップ・

独立

(四) 「グローバル」

四 孫三郎に影響を与えた思想―キリスト教、儒教・報

徳思想などの東洋思想

まとめ―孫三郎の現代的意義

(一) 継承・「下からの公共性」

(二) 人育て、類似実践へのインセンティブ

キーワード

企業家 ファイランソロピー 東西文明の調和 独立心

はじめに

江戸時代の天保年間に生まれた福澤諭吉と大隈重信は、それぞれ、『文明論之概略』と『東西文明之調和』という比較文明論を書いている。福澤は主として東洋文明を西洋文明より劣るものとして捉えていた。一方の大隈は、東洋文明の中にも世界的普遍的な要素が存在するはずだと考え、それ―西洋的な要素と一致するもの―を見出そうと努めた。大隈のように、日本の進むべき方向性を探る中で東西文明の調和を目指した人物は、程度こそ違え、他にも存在していたはずである。

現在のクラブウヤクラレ等の企業の基礎を築き、大原美術館の創立者として知られる、大原孫三郎もその一人である。孫三郎は、大隈の創設した東京専門学校（現早稲田大学）を退学した後、『聖書』と『報徳記』などから体得した精神で社会をより善くするための活動を生涯にわたって実践し続けた。

明治から大正、昭和前期までを生きた孫三郎は、社会という場を意識し、社会改良・公益のために寄与・貢献しようという使命感を持ち続けた企業経営者であった。当時は、貧富の格差の増大、社会革命思想の海外からの流入、恤救規則に伴う慈善意識のみが存在、という時勢であって、皇室や民間人による社会貢献的活動がある意味盛んにもなってきた。しかし、孫三郎の社会文化貢献は、規模においても範囲においても、またその持続期間においても、単に素封家であったから可能であったという範囲を超えていたと考える。そこで本稿は、このような企業人、大原孫三郎の倉敷・岡山などの地域を中心とした社会文化貢献と背後にあった思想について考察することにする。

一 大原孫三郎の略歴¹⁾

大原孫三郎〔一八八〇（明治十三）～一九四三（昭和十八）〕は、岡山県倉敷の大地主の家に生まれ、父の後をついで倉敷紡績株式会社の二代目社長となった企業家である。倉敷絹織株式会社（後に倉敷レイヨン株式会社、さらには株式会社クラレへと社名を変更）の社長や中国銀行の頭取なども歴任しながら、地元の倉敷・岡山を中心にして社会の問題にも積極的に関与した。

孫三郎が社会改良への使命感に目覚めたのは、青年期のことであった。孫三郎は、岡山藩主の池田光政と陽明学者の熊沢蕃山が創設した郷校の閑谷学校の子科で学んだ後、東京専門学校（現早稲田大学）に入学した。しかし、東京で自由を満喫し過ぎた孫三郎は、倉敷へ連れ戻されてしまった。このとき、孫三郎を連れ戻すために駆けずり回った義兄は、孫三郎が高利貸しに作った莫大な借金の後始末を行っている最中に東京で急死してしまった。このことは孫三郎にはかなり響いたと思われる。

故郷に戻って謹慎していた孫三郎は、二宮尊徳の『報徳記』などの著作にふれる機会を東京時代の知人から得た。また、岡山孤児院を運営していたプロテスタント・キリスト者の石井十次〔一八六五（慶応元）～一九一四（大正三）〕との出会いと、石井や周囲の人物からの感化によってキリスト教を信じるようになった。このような経緯によって孫三郎は、自分の財産は先祖から受け継いできたもの、神から預かっているものであり、社会をよくするためにそれらを投入する、という使命感に目覚めていったのであった。

二 孫三郎の社会文化貢献の具体例

(一) 大原美術館

大原孫三郎と聞くと、美術館を思い浮かべる人が多いようだ。後述するが孫三郎は、科学研究所のスタッフの欧米留学費用を負担したり、地域住民の啓蒙のための講演会を長期にわたって開催しつづけた。また、石井十次が運営していた岡山孤児院に対しては、十次との出会いから十次の死去後まで物心両面でかなりの支援を行うなど、孫三郎は教育、学術支援、人材育成にかなりの資金を投入していった。大原家では孫三郎の父の代から、有為でありながらも勉学の資金を持たない倉敷地域近辺の若者達への奨学金援助を開始した。奨学生の選抜面談は孫三郎が直に行った。

孫三郎から奨学金を得た人物の一人に画家の児島虎次郎がいた。東京美術学校（現東京藝術大学）で西洋画を学んでいた際に孫三郎から奨学金を受けていた児島は、東京府主催の勸業博覧会美術展で一等賞をとった。児島の絵画は宮内省お買い上げとなった。それを喜んだ孫三郎は、児島を五年間の欧州留学に旅立たせた。運よく児島は本場、欧州の絵画作品を直接目に見ることができた。しかし、そうではない日本の後輩のために西洋名画を購入したいと、児島は留学先から孫三郎に依頼し、孫三郎は多数の名画購入を承諾した。両者の間には生涯にわたってあつい信頼関係が存在していたのであった。

しかし、児島は心身疲労もたたって四十七歳の若さで死亡してしまった。「君の如く真面目に熱心に僕に対して衷心から尽くしてくれた者はいない。したがって僕が本当に心から信じていたのは君より外に一人もいなかった」と児島を偲んでいた孫三郎は、児島の死後から三ヶ月を経て、児島を記念する美術館建設を決意した。

画家を志す人々や一般愛好者にとって有益なものになればよい、と孫三郎が考え、児島を記念して建てられた大原美術館には、エル・グレコの「受胎告知」やモネの「睡蓮」をはじめとする西洋名画が常設されており、現在も倉敷の名所となっている。

(二) 三つの科学研究所—大原社会問題研究所、大原奨農会農業研究所、倉敷労働科学研究所

一九一八（大正七）年に米騒動が富山から発生し、それを皮切りに農民運動や労働運動などの社会運動が表面化し出した。労資双方、あるいは地主と小作人、または持つ者と持たざる者との両者にとってプラスとなる合致点が必ず存在するはずであると確信していた孫三郎は、革命思想には未来を見出さなかった。資本主義社会における構造的な欠陥を改良していく方向性を思索しよう、防貧を目ざそうと考えたのであった。孫三郎は、石井十次が体をはって実践していた慈善的・事後的救済ではその目的を貫徹できないと感じた。

そこで、日本の社会問題の研究を根本的に掘り下げて科学的、日本的に解決していくための科学研究機関として、大原社会問題研究所を一九一九（大正八）年に設立した。この研究所の所長には、東京帝国大学を辞職した高野岩三郎が紆余曲折を経て就任し、社会問題に関する研究や調査、それらの援助、学術講演や講演会の開催、研究書や翻訳書の刊行などが展開された。孫三郎は、運営費などの他に研究所スタッフの欧米留学費用も負担し、海外の重要な文献購入費として莫大な金額を提供した。しかし、この研究所は孫三郎が望んだ社会問題解決のための実地研究というよりは、マルクス主義を中心とした学術研究へと特化していき、危険思想の培養所と見なされるようになっていった。それでも孫三郎は、スタッフを信用して運営にも研究にも一切口出しをしなかったのだが、警察からの干渉を何度も受けていたこと、また、倉敷紡績の業績も芳しくなかったことから、孫三郎は窮地に立たされるようになってしまっ

た。³⁾ 結局、共産主義者が大量検挙された一九二八（昭和三）年の三・一五事件を契機として、研究所のあり方についての話し合いが繰り返され、大原社会問題研究所は大阪から東京へと移転することになった。その後、孫三郎から独立したこの研究所は、研究員の大内兵衛が総長を務めた法政大学に合併され、現在は法政大学大原社会問題研究所として存在している。

大原社会問題研究所の他にも、孫三郎は大原奨農会農業研究所、倉敷労働科学研究所といった研究所を設立した。順序から言えば、農業研究所が最初に設立されたものであり、地主の家に生まれた孫三郎が青年期の自粛生活中に小作人達の苦しい生活を目の当たりにしたことに端を発していた。農民の経済的地位を向上させるために農業の基礎研究を行おうと考えて設立されたこの研究所では、農業講習所、講演会や講習会が開設された。この研究所も当初の实地研究や教育的活動から次第に、純粹な学問的基礎研究へと活動の中心を移していったが、現在も岡山大学附属の資源植物科学研究所として存在している。

そして、倉敷労働科学研究所は、大原社会問題研究所の社会衛生関連部門が独立して設立されたものであり、資本主義経済の発展に伴って生じた労働者の諸問題を具体的に改善・解決することを目的としていた。実際には、倉敷紡績の女性労働者達を対象にした疲労問題や大気条件についての实地研究を行ったり、栄養価の高い饅頭を開発するなどして日本の労働科学の発祥地となっていた。この研究所も後年に孫三郎の下を離れたが、現在も公益財団法人大原記念労働科学研究所として存立している。

(三) 倉紡中央病院（現倉敷中央病院）

孫三郎が病院を設立した第一の理由は、倉敷紡績の従業員のために医療体制を充実させねばならないという責任感

であった。孫三郎は「従業員の健康上に遺憾なきを期することは、会社経営者として当然の義務と考えたのであります」と語っていた。

第二の理由は、石井十次の岡山孤児院を支援していた頃から考えていたものであった。震災などの自然災害を除くと、孤児達が社会に生じる原因は、困窮にあった。しかし、さらに突き詰めれば、困窮した生活によって親が病気にかかり、回復や生存ができなくなってしまうために子供達が孤児となっていることに孫三郎は気づいた。そこで、社会の問題の事前解決には、困窮している人々も理想的な治療を受けることができる病院が必須だと孫三郎は考えるようになった。

そうしている間の第一次世界大戦後、悪性感冒が大流行して数多くの庶民達が十分な治療を受けられずに死亡してしまったことを孫三郎は知った。これが病院設立の第三の理由となつて、孫三郎は、周辺地域の庶民階級の人達が実費診療を受けられるような病院を創設しようと決心したのであった。

病院設立を実行に移そうと考えた孫三郎は、京都帝国大学総長の荒木寅三郎医学博士と同医学部の島菌順次郎博士にアドバイスを求めた。両氏の見解に基づいて孫三郎は、以下のようなコンセプトで病院を創設することにした。

東洋一の代表的な治療第一の病院で、営利のみを目的としない、そして病院らしくない病院というコンセプトを念頭においていた孫三郎は、病院の根本方針をより具体的な表現で打ち出した。研究を主眼としない、慈善救済に偏しない、看護設備を充実する、病室に等級を設けない、充分な人数の看護婦を配置して付き添いを全廃する、院内従業員に対する心付けや謝礼、贈り物などを一切厳禁とする、どの患者に関しても完全なる平等無差別の取り扱いをする、という根本方針を孫三郎は徹底させようとした。

病院建設のための当初の予算は十五万円であった。しかし、最終的な総工事費用は、十倍を越える百五十万から二

百万円にもほった。岡山県医師会が、近隣の開業医への影響を懸念して反対を唱えたため、岡山県が総合病院ならば認可するという立場をとったためであった。大型の総合病院の建設へと変更を余儀なくされ、予算を大幅に超過せざるを得なくなったが、孫三郎は病院建設に関しても初志を貫徹した。

孫三郎は、設計に際して、色合いなどまで、相当細かな指図と点検を行った。北京のロックフェラー病院（現北京協和医院）に匹敵するような東洋一の病院、そして、病院らしくない明るい病院にする、という孫三郎の意向によって、木々や噴水を擁する明るく広い温室が病院の一階に設けられた。

後年の不況時には、倉紡中央病院の維持運営が倉敷紡績の経営にとって大きな負担となり、一部の株主や関係者から非難が出されたことがあった。そのとき孫三郎は、「この病院が仮に年々五万円づつ損をしても、それは決して無駄に消えるのではなく必ず戻つて来る。私が中央病院を造つたがために年々倉紡は損失だけするやうに見えるが、それは廻り廻つて倉敷の経済に利益をもたらし、倉敷の資本経済への好影響は更に倉紡に対して増大して帰つて来ると思ふ。万一それは算盤や数字の上に現はれないとしても、倉紡がこれによつて数字を超えて更に大きく恵まれるといふ確信を自分は持つてゐるものである」と長期的視点、地域社会貢献の視点を顕示しながら考えを説明していた。⁶⁾

倉紡中央病院は、一九二七（昭和二）年には倉敷中央病院と改称し、独立採算性の病院となった。そして、創立十周年の翌年一九三四（昭和九）年には財団法人に改組し、現在は公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院として、地域に根ざした医療を提供する努力を続けている。

（四）倉敷日曜講演⁶⁾

孫三郎が一九〇二（明治三十五）年二月から開始した倉敷日曜講演は、山路愛山が『信濃毎日新聞』で信州の人々

に勧めた、道義を説くための日曜講演にヒントを得たものである。この倉敷日曜講演には、山路愛山はもちろん、大隈重信や徳富蘇峰、新渡戸稲造、海老名弾正、金森通倫、植村正久、浮田和民、井上哲次郎、岡田朝太郎、小松原英太郎、高田早苗、幸田露伴などの当時の著名人が招かれた。倉敷地域の民衆の啓蒙を目的としたこの講演会の費用は孫三郎個人が負担し、講義録の印刷と希望者への無料配布、岡山県への寄贈などが行われた。

一九一四（大正三）年五月の第六十七回まで十三年にわたって続けられた間、準備や講義録作成などの作業全般は、地域の人々からの信頼があつた林源十郎が取り計らった。ちなみに、葉種商だった林は、同志社で学んだキリスト者で、孫三郎と石井十次の親交の橋渡しを行った人物であり、孫三郎の幼馴染で後に有名な社会主義者となった山川均の義兄でもあった。

(五) その他

その他にも孫三郎は、倉敷を中心とした地元の道路やトンネル、橋づくり等のインフラ整理、学生や研究者のみならず、民芸運動を推進していた柳宗悦などの芸術家たちへの支援、大阪に石井記念愛染園（現在も大阪の西成を中心に活動）を設立し、石井十次の意思を継いでセツルメントを展開するスタッフへの支援なども行った。

三 背後にあった孫三郎の特徴

では、孫三郎の社会貢献活動の背後にはどのような特徴が存在したのかを考察することにしよう。

(二) 善意と戦略の経営者—ウォーム・ハートにクール・ヘッド

父に代わって二十七歳で倉敷紡績の社長に就任した孫三郎は、旧習を打破する改革を行い、今でいう福利厚生の実をはかっていった。孫三郎は工場を、資本家が搾取する場ではなく、資本家と労働者が共に働き、共に高めあう場にしよという理想を抱いていた。その理想に伴い、イギリスのロバート・オウエンの業績や海外の工場経営法、ドイツのクルップ社の「困窮、死亡の際の疾病相互共済会」などを孫三郎は研究していた。

具体的には、会社と工員達の間に入って工員達を搾取している飯場制度を脅しや身の危険にひるむことなく全廃した。また、大部屋式の二階建て宿舍を従業員に健康衛生面のために分散式の家族宿舍に建て直した。さらには、工場内に職工教育部や学校教育に見合う勉強を提供する場を設けた。孫三郎は、弱い立場にある労働者の人格を重んじ、一人の人間として取り扱おうと同時に、教育によって労働者が人格を尊重されるに値する人間になることを助けること―孫三郎曰く「人格向上主義」―を重視していた。当初は「人道主義」という言葉を使っていたが、鐘紡のリーダー、武藤山治などが唱えていた温情主義との混同を避けるために人格向上主義という表現を使うようになっていった。⁷⁾

このように大胆な企業内改革については、採算が合わないとの批判を内部から受けるようになったが、孫三郎は、会社の利益に反するものではなく、必ず会社の利益を増進するものと主張して譲らなかつた。孫三郎は、従業員の幸福、健康、収入を増加させるなどとして、労使の利益が一致する協働作業の場を実現すれば、会社にもプラスになると確信していたのであつた。孫三郎は、社会貢献に力を入れた一方で、紡績会社を積極的に買収していくなど、営利を追及する企業家としての側面も有していた。孫三郎自身も、企業人として物事を遂行する場合には常に収支を考えたと語っており、財務表や統計の数字などにも頻繁に目を通していたということである。

(二) 社会と人間を見る目・「下」からの目線

孫三郎もちろん、一般的な明治時代の人々と同様に、戦時国債に貢献すべきだと考えたなど、「国家」を尊重する意識を有してはいた。しかし、「自分の思想を社会に実行する」や「社会の真の教育者」、または「最も有効に社会に奉仕する」という日記に残されていた文言は、孫三郎の貢献・奉仕の場、つまり改良を図って利害一致を目指す場は「国家」よりも「社会」という視点でとらえられていたことを表していると思われる。

また、孫三郎には権威主義的ではない、「下から」の、つまり民衆の立場から社会問題をとらえる視点が強かった。幼年期から金持ちの息子という理由だけで、不当な扱いを多く受けた孫三郎には、反抗心や反発心が強く根づいていて、権力や威信を誇るものには反発を感じていたと言われている。また、孫三郎にはキリスト者の石井十次の影響が大きいことは前述したが、利他精神が強かった石井には、孤児だけではなくその他の弱者を含めた、社会のそれぞれの構成メンバーを下から見上げる目が備わっており、その人々を対象にして同胞愛で生涯にわたって石井は救済活動に携わった。協調・調和を図って利害の一致点を発見する、という孫三郎の視点は、感化を受けた石井と同一線上にあるものであった。孫三郎は石井の経験をベースに「下から」の根本的・徹底的な解決策を求めるようになったと考える。孫三郎が石井と異なるところは、大原社会問題研究所のパートでも指摘したが、石井が人生をかけて行った救済・慈善事業では社会の協調・改善を図ることは不可能だと孫三郎が気づいた点にあった。いずれにしても孫三郎には、権威主義的な「上からの」要素はとて少なかつたと言える。

さらに、この「下からの」という姿勢は、孫三郎の人間自身を見る目、人間尊重の姿勢につながったのではないかという推測もここでは展開してみたい。人間の利害を一致させようと努めた孫三郎には、科学的、文化的に人間らしい幸福という視点が強かつたと考える。孫三郎と同様に社会貢献にも多数携わった渋沢栄一は、工場法を反対してい

た当初、その理由として、労働者の労働時間が規制されれば賃金が減ってしまうだろう、子供を雇用しないということになれば労働者の家計が困るだろう、或いは、衛生設備の充実よりも賃金が多いことを望むだろうとの見解を有していた⁹のだが、そこには「人間としての」、或いは「人間として稼ぐ」という視点の欠如が感じられる。経済のため人間なのか、人間のための経済なのか、という点あまり考慮されなかった時代の典型的な考え方であると思われる。

孫三郎は、倉敷労働科学研究所の設立前に、所長となる暉峻義等を伴って倉敷紡績の工場を夜間に突然訪問し、「何とかしてこの少女達が健康で幸せになるように」労働者の状態改善を科学的研究で図って欲しいと要請していた¹⁰。暉峻義等は、そのときの様子を詳述し、孫三郎の痛切な要求は真から出たものであり、感銘を受けたと回顧している。「片足に下駄と靴を履いて」と孫三郎自身が表現したように、困った立場の人々や社会のためにも尽力した孫三郎ではあったが、だからと言って、社会事業家になるのではなく、資本家としての立場も決して放棄することはなかった。しかし、それでも利己的、拜金的な資本家に徹するのではなく、倉敷紡績の女子工員達用に、衛生面にも配慮をした分散式宿舍を導入した。孫三郎は、労働者も生活者であり、人間であって、平等に好ましい労働環境と生活環境、そして満足と希望を享受するべきだと考えたのであった。つまり、孫三郎は、人間性や自由を売り渡す経済活動ではなく、人間性に基づいた経済活動を行いながら労使の協調を図ろうとしたのであって、その協調観の中には人間尊重の視点が強く備わっていたといえる。

(三) 使命感・自主的・民間からのリーダーシップ・独立

「絶対に自己の利害問題にあらず¹¹」という利他心で自主的に問題を解決して調和を図ろうとしていた孫三郎には、

岡山孤児院を運営していた石井十次との交流によってふれたキリスト教に裏打ちされた使命感が青年期に発芽したことは前述した。これはまた、自主的概念の肯定、或いは社会的責任感という言葉に置き換えることができるだろう。

孫三郎は、米騒動直後に大原社会問題研究所設立の許可を申請するために内務省を訪問した際、「社会問題の研究というより、政府の労資協調運動に協力して欲しい」という要請を床次竹二郎内務大臣から受けた。しかし孫三郎はこの要請を断わり、大原社会問題研究所を自己の資金で大阪に設立した。「社会問題を政府の都合などに左右されないで、根本的に研究する施設が必要だと痛感した」ということを語っていた孫三郎は、民間からの活動・リーダーシップを強く肯定していたと言える。

そして、このような使命感、自主的、民間からのリーダーシップ発揮という孫三郎の特徴は、当然の如く独立自営という概念をも含んでいた。孫三郎は、福澤諭吉の『学問のすゝめ』や『西洋事情』、『文明論之概略』などに従って、それまでの封建思想に代わる万人平等、自得自省、独立自尊などの重要性を説いたと言われているのだが、独立自営を重視する孫三郎の姿勢は、岡山孤児院の解散理由を語った言葉にも表れている。孫三郎は、「子供のためには、人は同情してくれるものだといふ感じを持たせた。即ち独立心を滅ぼし、自営の精神を奪ったのは最も悪かったと思ふ」と吐露していたのであった。¹⁴

(四)「グローバル」

ローカル・地域にしっかりと足をつけていて、グローバル・世界に目を向ける視点を「グローバル」と表現するならば孫三郎はこの視点を持っていたと言える。

倉敷周辺の民衆のために倉敷日曜講演を開催しつつ、地域の民衆のために病院をつくった孫三郎について、子息

の大原總一郎は、「父は、『自分は倉敷という土地にあまり執着し過ぎた、倉敷という土地から早く離れて中央に出ていたら、もっと仕事ができていたはずだ。お前も、あまり地方のことに深入りすると、仕事の邪魔になるぞ』¹⁵」
ことをよくいつていたが、私もそうとは思いつながら、やはり同じことになりそうである」という言葉を残しているよ
うに、孫三郎には、常に倉敷のため、岡山のため、という地域重視の視点があつたことがわかる。

その一方で、「余はこの倉敷は東洋の『エルサレム』たるべきであると信ず。否『エルサレム』たらしむるのが余
の聖職である。依つて余は倉敷を聖倉敷たらしめんと決心す」と、一九〇二（明治三十五）年十一月二十七日の日記
に記していた¹⁶。また、「東洋一の病院を」と考えたり、倉敷・岡山を改良して、日本、さらには世界の模範としていく
と示すなど、視点はグローバルに開かれていたと言えるだろう。

さらに言うならば、偏狭なエスノセントリズム―自民族・自文化中心主義―には陥つていなかったことも注記して
おきたい。孫三郎は、「中国から奪うことしか考えない日本人が多い中で」中国の北京で、貧困家庭の子女教育に携
わっている清水安三―桜美林学園の創設者―の活動、それ自体を考えただけでも清水は支援に値すると語つて、支援
を反対する声に耳を貸さなかつた。¹⁷

つまり、現代で使われることも多い「グローバル」という特徴を孫三郎は有していたのであつた。

四 孫三郎に影響を与えた思想―キリスト教、儒教・報徳思想などの東洋思想

若き孫三郎が東京から連れ戻された後に、林源十郎や石井十次などの影響でキリスト教にふれ、回心していったこ
とは前述した。現在の早稲田大学中退という学歴の孫三郎は、耳学問が得意であつたが、聖書と二宮尊徳の著作は、
生涯にわたつて熟読したと伝えられている。このような孫三郎については、「晩年には禁煙して『煙草貯金』を始め

たことなど翁らしい自律であつて、それらは青年時代、右手にバイブル、左手に報徳記をかかげた教養に基調が発見されそうで、この両書は精神となり、血肉となつたもので、キリスト教の愛を説き、二宮尊徳の行を談ることがしばしばあつた」という指摘もある¹⁸⁾。

また、大原家には儒者の森田節斎から受けた教え、「満は損を招き、謙は益を受く」という「謙受説」が孫三郎の祖父の代から伝わっていた¹⁹⁾。また、孫三郎の父は儒者の家系出身であつた。キリスト教を信じ、科学を信奉した孫三郎ではあつたが、儒教や報徳思想など東洋思想も孫三郎の根底に確かに流れていたのであつた。

まとめ―孫三郎の現代的意義

(二) 継承・「下からの公共性」

社会という場を意識し、社会改良のために、公益のために寄与・貢献しようという使命感を持ち続けた企業人、大原孫三郎は、フィランソロピー精神、変革への参加意志と勇氣に基づいて、民間人の立場で「下」から先駆的に福祉実践を行った。近代国民国家という枠組みのみを模倣した形で中央集権国家が「上」からつくられていった時代制約の中でのことであり、存命中にはその真意が正しく理解されない場合もあつたようである。

しかし大原孫三郎の社会文化貢献・実践は、規模においても範囲においても、単に素封家であつたから可能であつたという範囲を超えていた。その諭えの正当性については議論が分かれるかもしれないが、孫三郎を「日本のロバート・オウエン」や「日本のカーネギー」と呼んだ人物もいた。また、「岩崎弥太郎や安田善次郎ほど巨大な実業家ではないが、得た富を公益事業に使用したという点では三井も三菱も、いかなる実業家よりも偉大な結果を生んだ財界人で、語り伝えるに値する財界人である」と大内兵衛は孫三郎を評した²⁰⁾。速水優は、「孫三郎の偉業の凡てにイエ

ことは官の手を借りず、自らの理念とイニシアティブで自らの私財を投じたことであり、戦後日本の経営者と比較する時、そのスケールの大きさには驚嘆させられる。：第一次大戦後の経営難、社会主義研究に対する官憲・マスコミからの圧力。しかし、いかなる時にも権力に媚びず、世におもねず堂々と自らの理念を貫いているのである。：かつてマックス・ウェーバーが指摘した近代資本主義の担い手たちの職業観（エートス）との相似を感じてならない」との見解を示していた。²¹⁾

孫三郎の孫である大原謙一郎は、「京都では倉敷と同様にシビル社会が発達していたと言えます。京都はものすごく町衆の町なのですね。例えば十世紀、九世紀のころから千何百年続いてきた祇園祭という祭についてお話ししてみようか。祇園祭は、疫病対策に端を発したもののなのですが、これがお上による祭だったとしたならば、平家から源氏へ、それから鎌倉幕府、室町幕府、徳川幕府と権力が移り変わっていく中で、到底続いてはいないでしょう。町衆による祭だったから、今日まで続いているのです」との見解を示しているが、孫三郎の社会文化貢献の実践は、形態を変えながらも現在まで引き継がれているものがほとんどである。国家がその時代風潮に応じて施策として行ったものよりも、民間で推進したものが着目があったり、長く続いていたりする。このように考えると、市民に大きな影響を与えうる立場にある企業、或いは企業人は、政府とは独立して大きなリーダーシップや正義を民間から発揮しうる貴重な存在であることを企業人、大原孫三郎の社会文化貢献の実例はまさに物語っていると考える。

(二) 人育て、類似実践へのインセンティブ

孫三郎が有為な学生や研究者・芸術家などを支援したことは前述した。大原奨学生の中には、大臣になった人物や官庁勤めをするようになった人物もいたという。孫三郎が「地下水をつくるんだ」と言っていた人育ての代表例は、

子息の大原總一郎「一九〇九（明治四十二）～一九六八（昭和四十三）」ということもできよう。總一郎は、孫三郎とはまた異なった時代要請の中で企業人としてリーダーシップを発揮していった。²³

また、岡山市出身の土光敏夫「一八九六（明治二十九）～一九八八（昭和六十三）」も「下からの公共性」の体系的な実践者、企業人としてリーダーシップを発揮した人物ととらえることができる。土光は岡山県立岡山中学校の受験に失敗するなど、孫三郎と同様、学歴の面では決してエリートとは言えないかもしれない。しかし、大原奨学金を得て東京高等工業学校（現東京工業大学）で学んだ後の土光は、石川島造船所（現IHI）に就職し、その後、東京芝浦電気（現東芝）の経営者や経済団体連合会（経団連）の第四代会長も務めた。土光は、「日日新」を信条とし、過去を振り返らない姿勢を貫き、乞われれば老齢になってからも様々な社会・文化・経済的な組織でリーダーを務めたのであった。

日本には、キリスト教を基盤とした欧米のチャリティー慈善やノブレスオブリージュ社会的に地位の高い人物はそれ相応の責任を負うというような概念¹、フィランソピー²など他者への愛、共感が根付かないと考える人も多い。しかし、同じ地域出身の孫三郎や土光の例をみていくと、先例が次の世代、そして現代を刺激する、ということを強く感じる。孫三郎のような、地域のことに通じている人物が中心になった町づくり、地域活性化策、社会文化貢献は語り継がれ、周辺地域で模範となり、踏襲されていく可能性が大きいのではないだろうか。特に同じ地域では大きなインセンティブになっているのではないだろうか。新たなリーダーが生まれ、時代の要請に応じて、場合によっては、さらに広い地域での実践にもつながっていくのではないだろうか。孫三郎と接してきた岡山市出身の土光が日本、或いは世界を舞台にリーダーシップを発揮したことは偶然なのだろうか。孫三郎も、倉敷・岡山の実学の思想、民間人の実践重視の伝統に刺激を受けてきたと思われる側面が強い。

新たなリーダーは、先例を学び、身近に感じ、そして時代と自分たちの状況に鑑みて独創性を発揮しながら実践する。そのように考えると、歴史・先駆者例を客観的に踏襲していくこと、孫三郎の事例を、過去から未来へとという連鎖の中で見ていくことには現代的な意義があると考ええる。

注

(1) 大原孫三郎に関する一般的なエピソードなどについては主として、大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』中央公論事業出版・一九八三年、犬飼亀三郎『大原孫三郎父子と原澄治』倉敷新聞社・一九七三年、兼田麗子『福祉実践にかけた先駆者たち―留岡幸助と大原孫三郎』藤原書店・二〇〇四年、兼田麗子『大原孫三郎の社会文化貢献』成文堂・二〇〇九年、兼田麗子『大原孫三郎―善意と戦略の経営者』中央公論新社・二〇一二年他を参照。

(2) 『大原孫三郎傳』二四〇頁。

(3) 孫三郎が、一九〇五(明治三十八)年七月三十一日に洗礼を受け、フランス製のオルガンを寄贈するなどの援助も行った倉敷教会の五代目の牧師となった田崎健作は、大原社会問題研究所について孫三郎が次のようなことを語ったと後年のインタビューで振り返っていた。「石井先生の心をくだかれた社会問題の研究に乗り出し、高野岩三郎博士を中心に、大原社会問題研究所を解説して、時代に大波を送る結果となったのでありますが、これは石井先生の志をついだ結果であって、大原さんはたびたびその事をおっしゃっておられました。何でも、マルクス研究所ではなくて、Social Research Institution―社会のそのとき、そのときに起きてくる問題を研究する所のつもりで大原さんはいたのだが、研究員の人々が、出資者は研究に対して一切くちばしを入れないように、ということ、緘口令をしかれてしまったのです。そうして、研究所は、とかく議論一方に傾いていったので、大原さんは、これでは真実のものをつかむことができないのだから、科学的に、実験的に、行ってみる必要があると考えて、労働科学研究所を暉峻博士に任せて興したのですが、『石井さんが生存されていたら果たして満

足されたかなあ。両方とも思わざる方向に行ってしまったよ。石井さんならキリスト教の信仰から出発したのですが、この研究所の方向は、信仰から切り離された研究ですから、私にも、その当時はわからなくなってしまうました。ただ、学者の皆様にお任せしたのですから、私のごときは口ばしを入れるべきではないと思っております」とおっしゃっていました」と田崎は回顧していた（大原家所蔵の田崎健作インタビュー録、一九六六年四月、参照）。一九二三（大正十二）年から十五年七ヶ月の間、倉敷に滞在し、一九三一（昭和六）年から一年間、孫三郎などの援助を得て、欧州に留学した田崎は、孫三郎の「最もよき理解者」であった（犬飼亀三郎『大原孫三郎父子と原澄治』一一五頁、『大原總一郎随想全集』第一卷・福武書店・一九八一年・一〇〇頁）。

(4) 『大原孫三郎傳』一五九頁。

(5) 『大原孫三郎傳』一六一頁。

(6) 大原孫三郎というと、岡山県の中でもとりわけ倉敷だけに目を向けていたように現在も捉えられがちであるが、決してそうではなかったことを示しておきたい。孫三郎は、一九〇二（明治三十五）年十二月十四日に第一回の倉敷日曜講演会を開催した翌年からは、合計で十八回もの講演会を岡山市でも開催している（『大原孫三郎傳』五十一頁）。

尚、倉敷絹織が一九三五（昭和十）年に中国レーヨンを合併した際に発表した声明の中で、孫三郎は岡山市への思いを語っていた。「岡山市は父の郷土であるから、常々何とかして岡山市に酬いたいと思つていたところ、岡山市民諸氏の熱心なる誘致があつたので、中国レーヨンを岡山へ設置したのであるが、大体この中国レーヨンは倉敷絹織の岡山工場として設置する予定であつたのを中国レーヨンとして新立したものであるから、この合併は勿論予定の計画を履行したまでである。…今後は本工場の一層の発展を期し、県当局を初め岡山市民諸氏から与えられたる熱心なる御援助に対し酬いたいと思つている」と（『敬堂大原孫三郎傳（草稿）』一二七三―四頁）。

また、前掲注（3）でふれた田崎健作は、孫三郎が岡山市にも美術館やら大学やらを創設したい意向を持っていたことを明かしていた。ところが購入しようと思つていた土地の価格が五倍にも跳ね上がったので、孫三郎は諦めざるを得なかつたと田崎は伝えていた（大原家所蔵の田崎健作インタビュー録・一九七二年六月、参照）。

- (7) 『大原孫三郎傳』三二八頁。
- (8) 戦時国債には可能な限り貢献するように、という姿勢を有していた孫三郎ではあったが、戦争礼賛者ではなかった。孫三郎は「戦争は良民を苦しめ、どの方面から見ても理屈のたたぬ暴挙である。戦争を喜ぶのは御用商人のみなり」と日記に記していた(『大原孫三郎傳』六十二頁)。尚、本文で引用した社会に関する日記の文言は、同右、三十七・四十八・七十三頁を参照。
- (9) 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第三十一巻・渋沢栄一伝記資料刊行会・一九六〇年・六〇六〜七頁。
- (10) 暉峻義等博士追憶出版刊行会編『暉峻義等博士と労働科学』九十二頁。尚、暉峻と労働科学研究所については拙著『福祉実践にかけた先駆者たち―留岡幸助と大原孫三郎』でふれた。
- (11) 『大原孫三郎傳』四十八頁。
- (12) 同右、一三三〜四頁。
- (13) 犬飼亀三郎『大原孫三郎父子と原澄治』二十六〜七頁。
- (14) 同右、五十頁。
- (15) 『大原總一郎随想全集』第一巻・七十一頁。
- (16) 『大原孫三郎傳』五十五〜六頁。
- (17) 『大原孫三郎父子と原澄治』一七九〜八〇頁。
- (18) 郡山辰巳「高梁川人物伝九 敬堂大原孫三郎翁」『高梁川』八号・高梁川流域連盟・一九六〇年。
- (19) 『大原總一郎随想全集』第一巻・七十一頁他。

なお、倉敷紡績の社章は、森田節斎のこの「謙受説」を基にして孫三郎の父、大原孝四郎が考案した。二の字の下に三角形をなす点三つから成る、通称、二三(にさん)のマークは、いつも二番か三番でいる謙虚な気持ちで頑張る心を表わしたものだということであるが、倉敷絹織も「とにかく物事は一番になると慢心し、心が弛緩して退歩するものであるから、いつも一番に迫ろうとする希望に満ちた二、三番の謙虚な気持ちで、不断の努力を続けるべきである」という「謙受説」に基づい

た二三印を社章に取り入れた。

(20) 大内兵衛『高い山―人物アルバム』岩波書店・一九六三年・二二三・二二七―八頁。

(21) 後に日本銀行総裁も経験した速水優が、日商岩井会長と経済同友会代表幹事を務めていた頃の論稿（大原孫三郎の生涯）『月刊読売』一月号・読売新聞社・一九九三年・三七七―八頁。

(22) 大原謙一郎「地方の文化と国の再生―神戸生まれ京都育ちの倉敷人の視点から（研究会報告）」早稲田大学日本地域文化研究所編『吉備の歴史と文化』行人社・二〇〇六年・十一―二頁。

(23) 大原總一郎については『大原總一郎随想全集』第一・二・三・四巻、兼田麗子『戦後復興と大原總一郎―合成繊維ビニロンにかけて』成文堂・二〇一二年他を参照。

(24) 土光については、以下でもふれた。兼田麗子「土光敏夫と現代―人材観、経営観を中心として」『国際学研究』第六号・桜美林大学大学院国際学研究所・二〇一六年、兼田麗子「一九五〇年代半ば以降の『原子力ブーム』の背景についての一考察」『経済研究』第二十九号・大東文化大学経済研究所・二〇一六年。

【編者付記】本稿は、平成二十八年六月十八日の大倉山講演会における「大原孫三郎の社会文化貢献―大隈重信著『東西文明之調和』の実践―」と題した講演の記録を基に、加筆訂正を加えて成稿していただいたものである。